

# 令和5年度 短歌講座 歌集

講師 藤森 円 先生  
(塩尻短歌館指導員)

塩尻市中央公民館

令和五年度短歌講座を振り返って

毎年六月から翌年二月にかけて九回行っている中央公民館短歌講座です。回を重ね、このたびなんと五冊目の短歌集を発行していただくこととなりました。

この講座は、私の恩師である故・保科郁夫先生がかつてこの講座の講師をされていた。令和元年から私が受け持つこととなりました。以前からの方々や新しい方々も交え、形も少しずつ変えながら、続けて来しました。短歌を通じて、人と時間が繋がっていくことのおかげがえのなさを感じています。

当年度も引き続き、わずかに手を入れることでどれだけ変化するかを感じていただくような添削を心がけてきました。また、なるべく多くの情報を盛り込み過ぎず、言葉をそぎ落として、感動したことが端的に表れるようにと、申し上げてきました。

そんなことを胸に置きながら、あらかじめ皆さんの短歌のみを拝見し、講座当日に臨んでいます。しかし実際にご本人からのお話を聞いたり皆さんからの鑑賞を聞いたりすると、思いもしなかった深い「読み」が多くあることに気づかされます。私自身の読みの浅さに恥じ入ってしまいましたが、それ以上に、実際に対話しながら進めていくことの大切さを実感します。

紙や画面の上だけではわからなかったことが、皆さんの表情や声から多く感じ取ることができるとです。

九回の講座の時間を皆さんとともに過ごした、かけがえのない記録でもあります。

この歌集を読んで興味が沸いてきたら、ぜひ私たちと一緒に短歌を作りましょう！

令和六年三月

短歌館指導員 藤森 円

今日も又

子らの傷つく

画面見る

国異えども

その瞳我刺す

加藤容子

ユーチューブ

見たら止まらぬ

その時代

おぼろ記憶も

鮮明になる

浅井正臣

孫たちに

教えてもらい

ゲームして

うまくなつたと

ほめられうれし

米久保永江

色褪せる

籠に和紙張り

柿渋を

塗り重ねゆく

工程楽しむ

田辺幸子

五類まで

引き下げられて

よかったか

不安の残る

コロナウイルス

永原隆

学童も

収まる兆しに

マスク無く

笑顔まぶしい

学校給食

百瀬良夫

治水工事

掘りおこされし

川底の

叫びを聞きしか

あれは空耳

折橋美代子

苗木から

育てし花は

満開に

しだれて紅白

花桃美し

瀧澤裕子

朴葉巻き

始まりましたの

記事を見て

瞬時に心は

子供のごとく

古畑かめ代

こっそりと

投稿された

歌チラ見

ひとりほっこり

公民館主事

安藤寿秀

吾の庭の

百合は茎だけ

伸びすぎる

「そうだ」今年は

日傘をさそう

小島ふみ代

おり紙の

花束作りて

ばあばにと

帰りし後の

居間を彩る

三溝みい子

(早春) つきくさの

うつろふ影の

ゆたやかに

萌える草花

たまきはる命

村上カツヒコ

一周忌

父の墓前に

かすみ草

家族6人

清酒捧げる

島津文雄

「合格」を

聞きたる朝の

大空を

鳶悠悠と

弧を描きて飛ぶ

松澤美和

誘われて

再び学ぶ

短歌の道

ストップ老化

期待やいかに

萩原保子

我先と

ケーキ頬張る

夫制す

そこに子からの

メッセージあり

折橋玲子

郭公の

声さやかなり

あさはらに

桔梗ヶ原は

五月十五日

守屋喜久男

秒針は

せわしく時を

刻みをり

我人生も

かくの如きか

宮腰征彦

新緑の

R  
19  
を

駆けてゆく

空に向ひて

桐の花咲きをり

矢崎修子

被爆地の

喜び失望

ヒトの声

ひたすら我は

切り抜きをせり

薄田勝美

夕焼けが

代田に映り

息を呑む

輝く茜が

吾を包みぬ

土田安子

牛ならぬ

花に魅かれて

善光寺

夫と食べをり

素朴なランチ

水野典江

代掻きの

始まる安曇野

走り行き

故郷帰るは

三年ぶり

赤羽すえみ

験を担ぎ

試合前夜に

カツ食みし

マウンドの中三

頼もしと見る

藤松淑子

肩痛くて

何もできない

さあチャットGPTよ

草刈りたまへ

藤森円

この次の

ノーベル賞は

ウクライナで

ノーサイド笛

吹きたる人に

永原隆

ベテランの

友の後ろを

一歩ずつ

踏みしめ登った

にゅうかさやま

入笠山に

米久保永江

連休に

子等が剪定

してくれし

紫陽花咲きて

我を励ます

田辺幸子

牽牛と

織女の箱に

目は留まる

つい手に取った

夫への土産

水野典江

梅干しが

欲しいとメール

届きたり

息子に送る

夏負け予防

古畑かめ代

宿場祭

すぎて森閑

奈良井宿

何処か「ふき」の

煮る香ただよふ

折橋美代子

妹の

庭の花々

貰い来て

花器に挿しては

生花ラインす

小島ふみ代

銀河系

太陽系の

三番目

地球も我らも

また宇宙の子

加藤容子

腹へった

豪華絢爛

5つ星

サイフ覗いて

夢ははかなく

浅井正臣

様々な

異論を無視し

ほうき星

マイナカードを

急ぐ行政

百瀬良夫

ベランダで

お疲れ様です

星空と

真夏の夜に

ビールで乾杯

安藤寿秀

星降る夜<sup>よ</sup>

自転車こいで

足軽やか

半世紀過ぎ

なつかしみ居り

瀧澤裕子

孫ふたりの

誕生木の

花水木

大きく育つ

個性豊かに

松澤美和

白内障

「ポツン」と云える

眼科医に

ついにきたかと

年を考う

宮腰征彦

純白に

凜と咲き出す

半夏生

「いいお名前ね」と

どくだみの言ふ

赤羽すえみ

雑草は

光合成に

違ひありて

その生長が

早いと聞きぬ

土田安子

ひとひらの

朴の葉追ひて

かがめども

風に吹かるる

裏白の葉は

矢崎修子

三つ星の

レストランには

行けずとも

母の打つそば

五つ星

三溝みい子

「ワーきれい」

のばすこの手に

届かない



木曾の星空

いや高くして

荻原保子

「ひろき世に

嫁はいづくに」と

いはれつつ

星あひ夢みし

わかき日々はや

村上カツヒコ

偶に来る

巡回映画を

待つ間

星と思ひし

暗幕の穴

藤松淑子

燕岳の

ハイマツの谷の

星鴉

今年冬の

雪にそなへる

守屋喜久男

オリオンしか

知らぬ親子は

その辺りの

星を集めて

ねこ座を創る

折橋玲子

星の降る

街角続く

果てしなく

君の人生

朝まで語ろう

島津文雄

満天の

夜空に遊ぶ

孫と吾に

呼びかけるごと

一瞬の星

薄田勝美

あの星は

いつか地球に

落ちてくると

いふ友達を

信じてみた日

藤森  
円

水色の

ゼリー届いた

「ワツ金魚！」

泳いでるじゃん

食べずに見てよつと

加藤容子

冷戦の

うず

大きな渦が

よみがえ

蘇り

わが日本も

そのただ中に

永原隆

緑なす

早苗がゆれる

田の中に

ひらり優雅に

ちやみ

鷺舞い降りる

米久保永江

笹百合の

咲きし山道

今は無く

瞼に浮かぶ

花の色

古畑かめ代

人間の

近くで生きる

カラス達

トマトを突き

ゴミ袋突く

田辺幸子

狭い坂道

バツクする

大型の

バスドライバーに

安堵の拍手

三溝みい子

生活に

必須のことは

猛暑でも

炎天下での

道路工事は

土田安子

日課なる

散歩は近くの

青田道

風と光と

水音連れて

松澤美和

伝へたき

言葉探して

夕沈む

「腹がへった」と

傍らの人

矢崎修子

四年ぶり

祭りが来るよ

「おはや子」と

「わっしよい神輿」

かけ声を待ち

瀧澤裕子

ようやくの

祭りばやしに

耳を向け

老いていよいよ

吾が身浮かれる

百瀬良夫

さみ

淋しさは

祭りのあとに

やって来る

集うた人も

夏も去り行く

浅井正臣

赤色で

優雅な泳ぎの

君にした

猛アタックも

思い実らず

安藤寿秀

木造の

神輿たてよこ

転がして

勇壮破壊す

まつり

里祭り夏来る

折橋美代子

若い衆の

お囃子けいこの

奈良井宿

本番に向け

力がこもる

小島ふみ代

曲聞けば

手と足勝手に

踊りだす

玄番まつりの

狐にならう

折橋玲子

いそいそと

電車に揺られ

諏訪湖畔

団扇片手に

夕暮れを待つ

島津文雄

身を清め

まっ

慎み祭る

よび

世人らを

おほみかみは

いかにおぼしめさむ

村上カツヒコ

祭りの日の

はつぴ

揃ひの法被の

兄弟に

小遣渡せば

最敬礼せし

藤松淑子

祭りの日

和服の父と

衣装つけ

「浦安の舞」舞ふ

若き日の吾

赤羽すえみ

こだまする

「パンパンパン」

秋祭り

住まいなくした

雀はいずこ

守屋喜久男

おしなべて

すが

装い清し

阿波踊り

ひびかふ鳴り物

けたたまし宵

水野典江

がっこう

小学校が

みや

阿禮神社と地続き

祭り好き

よ

世代を継ぎ巣立ち

まも

式内護り

荻原保子

旅一座

一家総出の

舞台なり

小一の組

席並べ四日

薄田勝美

吾が子らと

ひたすら踊りし

玄番まつり

ああ寝言でも

叫びたる子ら

藤森円

原っぱで

遊ぶ子どもに

声かけて

返事もらえず

寂しき時代

加藤容子

朝ウォーク

新鮮な空気

独り占め

こんなぜいたく

他にはないね

米久保永江

ちち

亡父の植えた

赤白ピンクの

百日紅

酷暑に負けない

我を喜ばし

小島ふみ代

スペインの

土産は

黒色マグカップ

コーヒー注げば

遠き潮の音

折橋美代子

せせらぎと

木陰の続く

裏道は

精気はぐくむ

ウォーキング道

永原隆

送り盆

済ませて子等も

帰りゆき

夕暮れの風

そつと吹きくる

田辺幸子

旅帰り

疲れた顔に

西日射し

ぼんやり浮かぶ

楽しさ寂しさ

安藤寿秀

短歌道

進めば止みぬ

蝉しぐれ

夕日こぼれる

木陰道

古畑かめ代

夕映えの

山並みを背に

畑に立ち

せい

夏草の勢と

熱中症報

百瀬良夫

「まあすてき」

夕焼け空が

水面にも

染まりし揺れて

諏訪湖畔に観

瀧澤裕子

つらつらと

夕映えみつめ

何思う

時の流れと

うつろう世界

浅井正臣

終りなき

サツリク

殺戮ありて

考える

人間の業

イツ

何時も変はらず

宮腰征彦

連れ合ひも

仲間に加はり

三家族

話題は尽きず

お盆の帰省

赤羽すえみ

夏の陽も

簾越しでは

柔らかく

子ども頃の

家族顔ちくる

土田安子

畑から

とんで帰りて

夕食の

仕度していた

母の背まろし

三溝みい子

夕やけの

くもま

雲間を飛ぶは

神戸行き

事なくあれと

わたし

手を振る媼

荻原保子

賑やかに

盃蘭盆の過ぎ

吾子ら去る

夕べに夫と

送り火を焚く

藤松淑子

「さあ明日は

試合」と軽く

ノックする

夕暮れ淡し

父と子の影

松澤美和

かぎろひの

夕さりくれば

山里に

思ひ澄まさむ

ひぐらしの声

村上カツヒコ

暑き夏

玉ねぎスープ

冷やされて

遠花火ひびく

盆も終りに

矢崎修子

長尾氏の

いのちのことは

吾をめぐる

「その死は誰の

ものになるか」と

薄田勝美

夕暮れの

椋鳥の群

胡麻のごと

免許センターの

木叢に  
ついでる

守屋喜久男

一首詠む

夕陽差し込む

図書館は

誰も知らない

秘密の基地に

島津文雄

はす口を

手にまた君の

前に立つ

いりひ

入陽に揺れる

ゼファイランサスよ

水野典江

夕焼けを

埋め尽くすため

思ひ出の

赤トンボたちが

吾に迫り来

藤森円

起きてゐる

吾<sup>あ</sup>に聞こえる

看護師の

見回りの音

あたたかなりし

三溝みい子

ゾウさん逝き

歌声残る

ダックスの

モダンで明るい

ハーモニーは

赤羽すえみ

もう一度

奥の細道

読みたくて

なぞり書きする

芭蕉の忌日

宮腰征彦

哀調を

帯びた三味の音

静やかな

所作が身にしむ

おわら風の盆

永原隆

コンビニへ

ちいぢとアイス

買ひに行く

帰省の孫は

軽トラに乗り

矢崎修子

朝焼けの

朱から橙に

変はりゆく

女心は

歩を早めたり

守屋喜久男

蛸も

鳴かず秋の

虫さえも

聞かぬ今年の

異常を憂ふ

松澤美和

真っ赤なる

夕陽を見るに

人類の

叡智と無知に

落日が見ゆ

浅井正臣

思い出に

ドローン飛ばす

紅葉湖へ

かち

徒病むひとの

どこへでもドア

荻原保子

お彼岸の

墓参の小道の

をちこちに

揺れゐる渋き

吾亦紅の花

藤松淑子

知多の浦に

沖行く船の

影残し

鈴鹿の山に

入日あかなくに

村上カツヒコ

両親に

そつと捧げる

彼岸花

夕陽は赤く

秋の風吹く

島津文雄

還曆の

準備を夫に

茶化されても

太極拳の

衣裳は真紅

折橋玲子

北欧の

食卓真似て

肉煮込み

味わいの鍵

赤きペースト

水野典江

一番に

真つ赤なりんごは

「紅玉」か

あるいは「秋映」

どちらも大好き

土田安子

曼殊沙華

あい

枯草の間に

紅みせて

いづこに在りても

天上の花

薄田勝美

紅生姜の

かをりは奥歯を

転げ出る

秋祭りより

帰るはさびし

藤森  
円

庭に咲く

あお

アサガオの碧

鮮やかで

空と青さを

競うかのよう

米久保永江

思いきり

二階席から

「御嶽海」

声援及ばず

四日目黒星

小島ふみ代

お中日

帰省の娘等と

木曾路を行けば

すすきの穂波

白きさざ波

古畑かめ代

さよならか

抱いているのか

道の辺の

刈り残されし

すすきの穂群

折橋美代子

アキアカネ

葉先にひとつ

止まるや

病の友は

如何にかあらむ

加藤容子

木漏れ日の

土手に咲きたる

彼岸花

その赤き色

秋深めゆく

田辺幸子

紅葉の

秋は有るのか

此の猛暑

異常気象で

カラカラ大地

百瀬良夫

久しぶり

便りが届き

クラス会

楽しみに待ち

そっと紅引く

瀧澤裕子

穂やかな

秋風の中

ゆれている

丘一面の

銀の穂波よ

米久保永江

柿落葉

掃き寄せること

毎朝の

日課となりて

秋は行くなり

田辺幸子

残暑続き

時季おくれたる

柿をむく

互いに話す

子どもの頃よ

古畑かめ代

外国の

言葉飛び交う

奈良井宿

スマホ電卓

駆使して留守番

小島ふみ代

初霜なり

五竜、唐松、

鹿島槍

稜線染めて

今、目覚めたか

加藤容子

足早に

夏は去り行き

すがし秋

木々色づきて

今日は霜降

百瀬良夫

万葉の

霜の句あはれ

恋人の

去り行く朝の

足元濡らす

浅井正臣

霜月に

母は逝きして

二十年

あの声、姿

今もあざやか

瀧澤裕子

霜月の

秋の装い

感じずに

ひなたぼつこと

焼き芋楽しむ

安藤寿秀

初霜が

おりし狭庭に

黄蝶二羽

紫苑の残花に

命を舞うや

折橋美代子

富士山の

あをき山半分までを

冠雪す

冬物語り

秘めて静もる

矢崎修子

真夜中に

冬の星座を

見上げれば

宇宙の神秘

肌で感ずる

宮腰征彦

怪我をして

動けぬ友に

クウクウと

別れをつげる

野鳩の儀式

永原隆

霜降りて

夏の野菜は

息絶えり

野沢菜しんなり

旨み増しゆく

三溝みい子

霜月の

路地に秋風

吹き抜けて

すれ違う人

みな急ぎ足

島津文雄

ススキ枯れ

綿毛いずこへ

冬隣

初霜纏い

キラリキラキラ

荻原保子

謎のまま

耳に残りし

母の声

霜やけできたら

初雪塗れよ

折橋玲子

犀川へ

たづ

鵠舞ひおりる

北国は

霜枯れけらし

たづ

鵠舞ひおりる

村上カツヒコ

野沢菜の

霜消える朝

どこからか

姿見へねど

ジヨウビタキの声

守屋喜久男

霜月に

なれど今年の

暖かさ

半袖シャツが

かき氷に列

赤羽すえみ

草を引く

うなじ

夫の項の

汗光る

夏日と変はらぬ

霜月まひる

藤松淑子

霜が降り

あと

数日後は

夏日なり

動物・植物

戸惑ふばかり

土田安子

霜降りて

朝晩の冷え

著し

花水木の葉

散り急ぎをり

松澤美和

霜月に

姪の口から

バグってる

そんな言葉を

知ってるなんて

水野典江

霜焼けの

耳たぶ持てば

銀杏の

一つまみなど

思ふさびしさ

藤森  
円

気がつけば

吾も母の

逝きし歳に

迷ひもあれば

至らざる日日

赤羽すえみ

校庭の

端までのびた

わが影に

来し方思う

立冬の午後

永原隆

霜おりて

ミニトマトかれ

みどりの実

いっぱいつみて

ピクルスにする

塚原やよひ

朝の虹

見蕩れてをれば

ポツポツと

時雨降り来る

句会の帰り

松澤美和

掃き集む

落ち葉の重なる

音淋し

堆肥を作り

花を咲かせむ

土田安子

ことばより

共に在る時を

パニックの

おさなは息の

整ひてゆく

矢崎修子

クリスマスの

プレゼントあけ

「こわれてる」

サンタもびっくり

そうっと店へ

三溝みい子

クリスマス

残ったケーキも

乙なもの

孫のフォークが

部屋の片隅

島津文雄

ちはやぶる

神の御子の

クリスマス

あめ

天には栄え

地には平和を

村上カツヒコ

十二月

クリスマスソング

流れゆく

異国の友に

二人して乾杯

宮腰征彦

クリスマスは

耳を澄まして

空仰ぐ

遠き鈴の音

聞こえてくるよ

折橋美代子

「ピーヒョロロ」

あしたは雪だ

クリスマス

村の駄菓子屋に

母ちゃんがいた

守屋喜久男

クリスマスに

先駆け付けたる

電飾に

塩尻銀座の

宵の華やぐ

藤松淑子

冬日和

納戸の扉

開け放つ

ハロウインの後

聖夜のしつらい

水野典江

楽しさの

うた

短歌は詠めない

クリスマス

わ

主御座すなば

戦争止めて

荻原保子

走り居る

車に歌ふ

クリスマスソング

助手席の我も

口遊みゆく

矢崎修子

クリスマス

プレゼントもつ

君たちの

笑顔をずっと

忘れないでせう

藤森  
円

七十の

手習いとして

短歌はじめ

今や魅力に

取りつかれてる

米久保永江

背を丸め

後手組みて

歩く吾に

手は振りましようど

声掛けくるる

田辺幸子

晩秋の

木曾谷を出て

日歸りの

富士を仰いだ

三保の松原

小島ふみ代

小春日の

さえずり高き

校庭の

木々を飛び交ふ

渡り鳥らし

古畑かめ代

暮れ初めし

とちくぼ山の

黄もみじ葉は

「ままこだまし」の

夕日が包む

折橋美代子

木曾深き

奈良井の寺に

昔人

参り願うか

マリヤ観音

加藤容子

師走に入り

電飾かがやき

クリスマスツリーに

込めた

スイカやリンゴ

百瀬良夫

クリスマス

誕生日と

結婚日

同じ祝日

どうぞ幸あれ

瀧澤裕子

サンタさん

今年もきつと

来てくれます

中高生の

子どもが言い張る

安藤寿秀

クリスマス

親鸞さんも

驚くよ

宗教は

何を指すか

浅井正臣

おはようと

今日も挨拶

かわすのは

コンビニそばの

牛の銅像

米久保永江

ぎつしりと

土手に立ちたる

霜柱

薄き日差しに

煌めき増して

田辺幸子

就職の

男孫に宛てて

書く手紙

幼き頃の

うた

短歌も二つ三つ

折橋美代子

南天に

葉牡丹水仙

千両と

香りの好きな

口ウ梅活ける

小島ふみ代

打ち続く

医院廃業

無視しての

マイナ保険証

一本化実施

百瀬良夫

わが友は

夢を語りし

叶うなら

樹木医となり

国、世界訪ふと

滝澤裕子

醒めてなお

いま一度と

目を閉じる

きみの香りの

夢と知りせば

加藤容子

縁側に

正座の祖母の

夢をみる

時には真顔

時には笑顔

古畑かめ代

初夢の

中身は覚えて

いないけど

夢見よくない

今年厄年

安藤寿秀

振り返り

病院通い

増えたけど

可も不可もなき

年となりたり

永原隆

干し柿を

持って来た友

コーヒーで

午後のかたらい

楽しかりけり

塚原やよひ

「戦争を

やめてください」

今宵また

おさなを想いつ

祈りておりぬ

薄田勝美

少しだけ

も

日が長いと思い

安堵する

冬至の後の

二十五日に

土田安子

もう一度

夢をみようか

あちこちに

置き忘れたる

夢もう一度

三溝みい子

会ひたいね

賀状に毎年

書きたるも

夢の叶はず

五十年過ぐ

藤松淑子

定年後の

夢を叶へて

兄は今

中国に立つ

教壇に立つ

折橋玲子

いつの間に

子育て終えて

共白髪

夢の続きは

七人の孫

島津文雄

柿の木に

福良雀が

三羽いて

年末ジャンボの

夢は星空

守屋喜久男

あら玉の

年の始めの

日の出燃ゆ

よ  
い  
し  
や

善事によごと

夢合ひ願わん

村上カツヒコ

傘寿来し

眠りは浅く

夢も見ず

摸さえ来ない

草庵さみし

荻原保子

ガザの地で

笑顔の子供が

ボール蹴る

そんな初夢

今年は見たいし

赤羽すえみ

吾が孫の

十五の夢も

詰め込んで

走れ走れよ

青春列車

松澤美和

初夢を

追いかけてはや

八十路入る

楽しくありて

今だ夢の中

宮腰征彦

三歳児

熱さがらずに

病院に

今吾に世話焼く

ぢ

まじや

お父さん実うるさき

矢崎修子

いつだろう

支離滅裂の

物語り

今は薬で

夢さえ見ない

浅井正臣

寝過ぎました！

しなのに乗れない

いや待てよ

夢かうつつか

気持ちは逸る

水野典江

わが夢は

冷凍保存

してました

解凍したら

汁が出ました

藤森  
円

元旦の

カラスの鳴声

身にしみる

能登半島の

天地返りて

守屋喜久男

この地の下

大きなナマズが

ゐるやうな

好物供へて

お怒り鎮めん

三溝みい子

厄除けし

ほつと息つく

境内に

一斉響く

地震速報

折橋玲子

己が家を

同じ震災の

家において

なほ公務なる

人に幸あれ

村上カツヒコ

辰年の

しよにち

初日に起きたる

能登地震

固唾を呑みて

よもすがら

終夜見る

藤松淑子

能登地震

はや一ヶ月

経過せり

「ハロー」の声に

元気づけらる

宮腰征彦

じつとして

居れず集まる

ボランテイヤ

能登の先まで

道つながらず

赤羽すえみ

新しき

年の初めに

襲いきた

能登の地震に

出ばなくじかる

永原隆

被災した

友を訪ねて

国道を

行き交う人の

波をかき分け

島津文雄

くずれゆく

我が脳みそに

震災が

怒涛のごとく

せき切って来る

矢崎修子

誰をもが

忌避することば

震災は

でもまたいつか

我が身に起きる

浅井正臣

な  
ゐ

能登の地震の

漁港に漂ふ

船底を

黙し見つむる

漁夫のまなざし

土田安子

愛唱の

「北陸旅情」

御当地を

おもんぱかれば

顎ビブラート

荻原保子

被災地の

方想ひて

並ぶ列

音をあげさうな

早朝のホーム

水野典江

鈍色の

空に続かむ

真紅の実

仰ぎて祈る

震災の地へ

薄田勝美

今ここで

震災が起きたら

怖気づき

動けないことも

想像しておく

藤森円

西行は

はなのもとにて

春逝けり

「我も」とあこがれ

幹かき抱く

加藤容子

孫たちと

元日の朝

ウォーキング

今年もいい事

いっぱいあるよ

米久保永江

日本晴れ

仰ぎ歩けば

枝の先

ちらほら見ゆる

咲き初めし梅

古畑かめ代

放映の

能登震災に

おお

目を覆う

倒壊、寒さ

助けの行動を

瀧澤裕子

牛伏寺の

厄除け参りの

鐘を撞き

日増しに願う

能登の復興

小島ふみ代

辰年の

平穏願いし

その夕べ

おおない  
い  
く

大地震出で来

思い吹き飛ぶ

百瀬良夫

孫たちに

誘われてゆく

初詣

震災の地の

復興祈る

田辺幸子

見たくない

瓦礫の山の

映像を

じっと見つめる

忘れてやらない

安藤寿秀

「能登地震」

家族五人を

失ひて

一人残りし

ひと

男性の慟哭

折橋美代子

ネコのプク

二十一才が

おだやかに

わがうでの中

旅立ちてゆく

塚原やよひ

おわりに

塩尻市中央公民館短歌講座の歌集第五号ができました。

令和五年六月から令和六年二月までの九回の講座の中で、受講生の皆様が投稿され、藤森先生からご指導いただいた短歌を掲載いたしました。一首一首に、その時の受講生の皆様の思いが深くこめられています。熱心に受講された皆様の短歌講座のまとめとして、この歌集を発行いたしました。

短歌の魅力の一つとして、「短歌には解釈の余白がたくさんある」といわれています。この歌集が、これからの皆様の作歌に役立つことを願っています。

本講座の講師、藤森 円先生には、一首一首について、丁寧にわかりやすくご指導いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和六年 三月

塩尻市中央公民館長

青柳信雄

**令和5年度短歌講座 短歌集**

編集・発行 塩尻市中央公民館

発行日 令和6年5月

お問合せ 中央公民館

電話：0263-52-0899